

NEWSLETTER of The Japanese Society for Applied Animal Behaviour

No. 12, April 2008

◇ 新役員発足にあたっての新年度挨拶

応用動物行動学会 会長 近藤誠司
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)



4 月中ばを過ぎ、皆様には新たな年度の始動の中でお忙しいことと思います。さて、先月末の応用動物行動学会総会で、新たな役員人事が認められ、総会報告にあります人員で、この2年度を務めることとなりました。どうかよろしく願いいたします。

気候温暖化の影響か、春の訪れが早く感じられます。ここ北国でも、雪解けが例年より遙かに早く、わたしも札幌の北大キャンパスでの放牧開始も昨年より10日ほど早く、来週早々に始める予定で、てんてこ舞いです。

先月の応用動物行動学会・日本管理学会合同学会では60題という近年にない盛況で、この分野における関心の高さが伺えました。今回は、野生動物関係、動物園動物関係の発表が目立ち、頼もしく感じました。またシンポジウムでは、学位を取得したばかりの若手2名の恒例の話題提供があり、それぞれにおもしろく、若い力を感じた次第です。一方、盛会であっただけに会場の手配やプログラム作りは大変だったでしょう。当番校である茨城大学の皆さん、また両学会の事務局の皆さんには心からお礼申し上げます。

今年のISAE大会はアイルランドのダブリンで開催されます。当地は寒冷地区における放牧に関する研究が伝統的に行われ、現在もプロダクションに直結した興味深い研究が盛んに行われている地域です。参加する若い諸君で放牧関係の仕事をしている方々には実り多い学会になろうかと期待しております。

前会長の佐藤衆介先生が中心となって動いている我が国における動物福祉の基準作りも、いよいよ佳境に入ろうとしています。農水のとりまとめの一応の目標は2010年と記憶していますが、関係者の皆さんには一層のご努力を期待しております。

新役員として、このニュースレター編集を担当している茨城大学の小針先生が加わりました。役員・事務局一同、我が国における応用動物行動学の発展のため、一層努力していく所存でございますので、皆様の倍旧のご指導・ご鞭撻を賜りたく、お願い申し上げます。

◇ 総会の開催

副会長・事務局長 森田茂
(酪農学園大学)



2008(平成20)年応用動物行動学会総会が2008年3月28日13:00より13:30まで、常磐大学R棟002ミニシアターにて開催された。前日行われた評議員会での議論をふまえ、事前に配布した資料に沿って2007年度活動報告、会計報告、会計監査報告がなされ、承認された。また、2008年度事業計画案および予算案が提示され、審議のうえ、承認された。

事前配布資料の修正および追加説明

- 1) 投稿規定の見直しを、提示された案に従い編集担当副会長が検討する。
- 2) 来年度研究発表会の要旨を1ページ(A4)、別刷りの有料化など、会誌発行費の節減に向け検討する。
- 3) シンポ関連：昨年度同様、家畜管理学会などとの共催で、シンポジウムを開催する。
- 4) 家畜管理学会で森田琢磨先生のご遺族からの寄付をもとに企画された、優秀発表および優秀論文賞は、応用動物行動学会会員にも適用される。
- 5) 国際応用動物行動学会議への研究者派遣該当者として、新村 毅(麻布大学)および多田慎吾(北海道大学)が決定した。総会の最後に贈呈式を行った。



役員名簿

応用動物行動学会 2008—2009 年度役員

会長 近藤誠司(北海道大)

副会長 上野吉一(東山動植物園,大会委員長)、森田茂(酪農大,事務局長)、植竹勝治(麻布大,学会誌編集委員長)

シンポ担当幹事 青山真人(宇都宮大)、会計担当幹事 出口善隆(岩手大)、会員担当幹事 瀬尾哲也(帯畜大)、ニュースレター担当幹事 小針大助(茨城大)、通信担当幹事 竹田謙一(信州大)

無担当幹事 友永雅己(霊長研)、内田佳子(酪農大)、加隈良枝(帝京科学大)、矢用健一(生物資源研)、楠瀬 良(JRA 総研)、田中智夫(麻布大)、佐藤衆介(東北大)

監 事 杉田昭栄(宇都宮大)、柏村文郎(帯畜大)

評議員 安江健(茨城大)、河合正人(帯畜大)、長谷川信美(宮崎大)、安部直重(玉川大)、山田明央(畜草研)、岡本全弘(酪農大)、松井寛二(信州大)、小迫孝実(農水省)、中西良孝(鹿児島大)、尾形庭子(どうぶつ行動クリニック・FAU)、森裕司(東大)、松浦晶央(北里大)、梶光一(農工大)、坪田敏男(北大)、鈴木正嗣(岐阜大)、池田透(北大)、仲谷淳(中央農研セ)、江口祐輔(近中四農研セ)、塚田英晴(畜草研)、羽山伸一(日獣大)、織田銑一(名古屋大)、小山幸子(Indiana 大)、石田賤(帝京科学大学)、菅豊(東大東洋研)、木村李花子(馬事文化研究所、インド) 以上役員および評議員は、2008/03/28 開催の応用動物行動学会総会にて承認。

2007 年度決算

2008/2/29

| 項目 | 収入(円) | | 支出(円) | | |
|--------|-----------|----------------|------------|---------|----------------|
| | 2007 予算 | 2007 決算 | 2007 予算 | 2007 決算 | |
| 前年度繰越金 | 189,167 | 189,167 | 会誌発行費 | 280,000 | 118,041 |
| 個人会費 | 276,000 | 322,000 | シンポジウム・学会費 | 30,000 | 37,020 |
| 賛助会費 | 0 | 0 | 会議費 | 1,000 | 0 |
| 雑収入 | 1,000 | 6,197 | 通信費 | 1,000 | 0 |
| | | | 消耗品費 | 1,000 | 243 |
| | | | 謝金 | 2,000 | 0 |
| | | | 手数料 | 1,000 | 0 |
| | | | 予備費 | 40,167 | 18,007 |
| | | | 次年度繰越金 | 110,000 | 0 |
| 合計 | 466,167 | 517,364 | 合計 | 466,167 | 173,311 |
| 収支差額 | 344,053 円 | | | | |

特別会計 2007 決算

国際応用動物行動学会派遣など基金決算 (設立 2006/02/26)

本基金は ISAE2005 開催の余剰金を基に設立され、その管理・運用は、締結書に基づき応用動物行動学会が実施している。

| 項目 | 収入(円) | 支出(円) | |
|--------------|-----------|-----------------|---------|
| 前年度繰越 | 2,828,230 | 研究発表者派遣補助 | 200,000 |
| 利子 | 3,828 | (二宮茂) | |
| | | 役員派遣補助 | 200,000 |
| | | (ISAE2007 近藤誠司) | |
| | | 市民公開シンポ | 50,000 |
| | | 送金料手数料 | 472 |
| 合計 | 2,832,058 | 合計 | 450,472 |
| 2007 年度末基金残高 | 2,381,586 | | |

2008 年度予算（案）

| 項目 | 収入(円) | | 支出(円) | |
|--------|---------|---------|------------|---------|
| | 2008 予算 | 2007 予算 | 2008 予算 | 2007 予算 |
| 前年度繰越金 | 344,053 | 189,167 | 会誌発行費 | 280,000 |
| 個人会費 | 300,000 | 276,000 | シンポジウム・学会費 | 50,000 |
| 賛助会費 | 0 | 0 | 会議費 | 12,000 |
| 雑収入 | 1,000 | 1,000 | 通信費 | 1,000 |
| | | | 消耗品費 | 1,000 |
| | | | 謝金 | 2,000 |
| | | | 手数料 | 1,000 |
| | | | 予備費 | 298,053 |
| | | | 次年度繰越金 | — |
| 合計 | 645,053 | 466,167 | 合計 | 645,053 |

特別会計 2008 予算

国際応用動物行動学会派遣など基金予算（設立 2006/02/26 当初 3,026,977 円）

| 項目 | 収入(円) | | 支出(円) | |
|------------------|-----------|--|-----------|---------|
| 前年度繰越 | 2,381,586 | | 研究発表者派遣補助 | 270,000 |
| 利子 | 3,000 | | 役員派遣補助 | 130,000 |
| | | | 市民公開シンポ | 50,000 |
| | | | 送金料など | 1,500 |
| 合計 | 2,384,586 | | 合計 | 451,500 |
| 2008 年度末基金残高(計画) | 1,933,086 | | | |

◇ 学会誌 Animal Behaviour and Management の
投稿規程改正案について

副会長・学会誌編集委員長 植竹勝治
(麻布大学)



2008 年 3 月 28 日の総会におきまして、以下の投稿規程改正案が評議員会より提案され、ご了承いただきました。今後、皆様のご意見を踏まえまして、投稿規程の改正を進めてまいりたいと考えております。つきましては、本規程改正案についてのご意見、ご要望等が

ございましたら、以下の連絡先 (uetake@azabu-u.ac.jp) までご連絡いただきたいと思いません。ご協力よろしくお願いたします。

Animal Behaviour and Management 投稿規程 (案)

1. 掲載論文

- 1) Animal Behaviour and Management (ABM) に掲載する論文は、原著論文、短報、総説、解説、資料、シンポジウム報告、講演要旨とする。
- 2) 投稿論文は、ヒトと係わる動物である産業動物 (家畜)、伴侶 (愛玩) 動物、実験動物、展示動物、野生動物の行動と管理に関する基礎的・応用的研究で、家畜管理学および応用動物行動学上価値ある内容を持ち、本投稿規程に従ったものでなければならない。また、他誌に未発表のものに限る。

2. 投稿論文の作成方法

- 1) 投稿論文は、和文または英文とする。
- 2) 投稿論文の原稿作成にあたり、和文については「日本畜産学会報投稿規程」の7および「日本畜産学会報のための論文投稿の手引き」の【論文作成方法】、英文については「Animal Science Journal 投稿規程」の7および「Animal Science Journal のための論文投稿の手引き」の【論文作成方法】に従うものとする。なお、これらの投稿規程ならびに論文投稿の手引きは、社団法人日本畜産学会ホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/jszs/>) からダウンロードすることができる。
- 3) 投稿論文は、電子メールで添付ファイルとして編集委員会宛て送信する。原稿は、原則、MS Word および Excel 形式とする。原稿には、必要事項を記入した原稿投稿用紙を添付する。原稿投稿用紙は、日本家畜管理学会ホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/jslm/>) からダウンロードすることができる。

3. 投稿論文の審査および掲載方法

- 1) 論文の採否は、編集委員会が依頼する論文審査員の審査を受けた後、編集委員会が決定する。したがって、編集委員会は原稿を返却したり、訂正を求めたりする場合がある。なお、動物に不必要な苦痛を与えるなど、倫理に反すると判断した場合は、掲載を拒否することがある。
- 2) 審査が終了した時点で、受理論文については、最終原稿を電子メールで添付ファイルとして編集委員会宛て送信する。この段階での加筆、訂正は認めない。
- 3) 論文の掲載は、原則として審査終了 (受理) 順とする。
- 4) 著者校正は1回とする。校正結果は、電子メールもしくは Fax にて、指定された期日までに編集委員会宛て返信する。
- 5) 本誌に掲載された論文の著作権は、日本家畜管理学会および応用動物行動学会に属する。
- 6) 別刷は掲載論文1編について50部とし、それ以上必要な場合には、その分についての実費は著者負担とする。

昭和 62 年 4 月 3 日一部改正
平成 3 年 10 月 30 日一部改正
平成 5 年 4 月 21 日一部改正
平成 6 年 3 月 31 日一部改正
平成 8 年 3 月 30 日一部改正
平成 10 年 3 月 29 日一部改正
平成 21 年 3 月 X 日全面改定

Animal Behaviour and Management 編集委員会

<日本家畜管理学会>

長谷川信美 (投稿受付・審査担当)

〒889-2192 宮崎市学園木花台西 1-1 宮崎大学農学部食料生産科学科

Tel & Fax: 0985-58-7194

Email: nhasegaw@cc.miyazaki-u.ac.jp

<応用動物行動学会>

植竹勝治 (著者校正・編集担当)

〒229-8501 相模原市淵野辺 1-17-71 麻布大学獣医学部動物応用科学科

Tel & Fax: 042-769-2521

Email: uetake@azabu-u.ac.jp

◇ 2008 年春季研究発表会報告

副会長・大会委員長 上野吉一
(東山動物園)



26 演題ののエントリーを今回は受けた。昨年は 8 件だったことに比べれば、大きな飛躍である。またこれまでは畜産関係が、発表のほとんど（ほぼ全て）だったが、今年は動物園関係も健闘し、7 演題も発表があった。申込数が予想以上の多さのだったため、プログラムを作成してくれた江口先生にはご苦労をかけた。この場を借りて感謝したい。

伴侶動物を研究している方からは、この時期他の学会等のスケジュールの重複があり、出席しにくいという指摘も受けている。今後は、畜産管理学会との共同開催をやめ、独自の開催を考えていく必要があるかもしれない。これから議論していくべき重要な課題だと考える。

また、実験動物関連の発表が出てこない。これも何とかしないといけない。産業土物、展示動物、伴侶動物、そして実験動物を含めてこそ、動物福祉を科学する応用動物行動学会のあるべき姿になると思う。どうすれば、実験動物を扱っている人をこの学会に参加してもらえるか、アイデアを持っている人は是非とも、このニュースレターを使用してでも意見を出してもらいたい。

最後に、今年も盛り上がった懇親会に触れたい。今年は、大会実行委員会の都合等もあり、ぎりぎりまで会場が決まらずにいた。そのため懇親会を諦め、会場を後にした人もいたようだ。とはいえ、こうした多少の問題はあったが、懇親会には多くの人に参加してくれ、非常に盛況なものとなった。来年は、事前に懇親会まで計画した方が、参加者にとってはありがたいだろうと感じた。

発表会として来年は今年以上の発表者数になることを願うとともに、より一層活発な学会になることを期待したい。

◇ 2008 年春季シンポジウム 「野生動物との共存を考える」報告

シンポジウム担当 青山 真人
(宇都宮大)



茨城県水戸市常磐大学で、2008 年 3 月 27 日-29 日の 3 日間、第 109 回日本畜産学会大会が開催された。それに伴って、最終日である 3 月 29 日、まさに最後の催し物として、本学会と日本家畜管理学会との共催で「野生動物との共存を考える」というテーマでシンポジウムを開催した。家畜行動の小集会時代からの伝統である、「学位を取って間もない若手

研究者の講演を聴く」場として開催した。今回のシンポはかなりタイトなスケジュールの中での開催であり、計画している途中で「こんなにタイトなら、今回は止めようか・・・」という考えも一瞬頭をかすめたが、茨城大学の先生方の協力があった、開催できた。

一番目の講演者の塚原は、所属は東京農工大学連合農学研究科であるが、実際には宇都宮大学で杉田昭栄教授の指導の元、カラスの鳴き声の研究をしており、青山と同じ研究室に属する大学院生である（本来ならば「塚原先生」と書くべきかも知れないが、身内なのでここは「塚原」と呼び捨てさせて頂こう）。塚原の学位論文のテーマはカラスの鳴き声と鳴管（鳥類の発声器官）の形態との関係が主であるが、彼はこの研究の合間にカラスの鳴き声を用いたハシブトガラス（以下、単にカラス）の行動の操作、特に忌避についても、研究を行っている。ある有害野生鳥獣を忌避するためにその動物自身の鳴き声を用いる、というアイデア自体は特に珍しくはない。塚原は、カラスに見破られる可能性を減らすべく、鳴き声に現実味を持たせるために、例えば「警戒の鳴き声」を聞かせた後に「逃避の鳴き声」を聞かせるといった、自然状態でカラスが踏むステップにより近い順番で声を聞かせることにより、忌避効果を上げるということを試みている。室内での実験の結果、「警戒」「逃避」などの鳴き声を単独で聞かせるよりも、組み合わせて聞かせた方が、カラスがより「落ち着かない」ように見えた。今後、これをどう応用して行くかが課題であろう。また、青山は個人的に、カラスが本当に「現実味」を感じているのかどうか知りたいところである。忌避を構成する要素を提示する「順序」が影響するかどうかを観ることによってこれを解明できるかも知れない（例えば、実際とは逆の順序：逃避→警戒の順だと、すぐに見破られてしまうとか・・・）。

二番目の講演者である八代田先生は、北海道大学大学院で、本学会会長である近藤誠司先生の指導の元、「野生エゾシカの養分要求量からみた環境収容力に関する影響」というテーマで研究をされており、今回はこのテーマについての講演を頂いた。北海道のエゾシカ生息地における植生の調査と、エゾシカ（シカのモデルとしてウシを使用することもあるとのこと、「反芻動物」と言った方が適切か？）の栄養生理から、そこに生息できるエゾシカの頭数を求めるという内容である。青山にとっては、普段聴くことがあまりない内容であった。八代田先生の講演で青山がそのときに二番目に印象に残ったのは、シカは季節によって消化率等の栄養生理状態が変化する、ということである。最初、「単に季節繁殖動物あるから、繁殖生理が季節変化したために起こる二次的な結果ではないか」と考えたのだが、そうではなく、季節ごとに変化する植物相に合わせた適応、ということであった。講演を聴いているまさにそのときはあまり思わなかったが、後でシンポの整理をしているときになって、八代田先生の研究が、野生動物の忌避のために必要不可欠であることが分かったのである。青山は動物のストレスを研究しているので、有害野生鳥獣対策という、つつい「心理ストレス」や「認識」が絡む忌避そのものにだけ興味が行ってしまう。しかし、現場に応用した際に強い忌避効果があったとして、忌避された動物はどうなるのか。その動物が生きてゆくのに十分な食物が自然界にあるのかどうか、によって忌避の結果も変わるだろう。自然界に十分な食物がなければ、どんなに強い忌避刺激を用意しても、彼らは

決死の覚悟？でまた戻って来るだろう。そして、実害がない刺激は結局見破られることになる。一方、自然界に食物が充分あれば、すなわち環境収容力が充分なら、彼らは「あっちの方がうまそうだけど、恐ろしそうなものが置いてあるし、まあここでもいいか・・・」と思って、おいそれとは人里に降りて来ないだろう。結局、忌避の効果を上げるためには、環境収容力の調査、さらには確保が必要なのである（もっと早く気付けよ、と言われるであろう）。

ちなみに青山が八代田先生の講演で一番印象に残ったのはハンティングの話であった（森田先生の質問から始まった、余談的な話しである）。八代田先生と近藤会長が猟銃を持って北海道の原野を闊歩している姿を想像すると、北海道を訪れた際には、札幌の街中に貼り付いて、決して原野の方には近づかないようにしましょう、と決心した。

最後になりますが、シンポジウムの際には、麻布大学、東北大学の学生さん（申し訳ありません、お名前を忘れてしまった学生さんがいるので、「学生さん」で統一させて下さい）に受付係り、タイムキーパーを引き受けて頂きました。また、宇都宮大学の高橋には、カメラマンを引き受けて頂きました（それから、この後に参加者代表として報告を書いてもらいました）。そして何より、場の設定にご協力頂いた茨城大学の先生方、学生さんに感謝致します。特に、会場の設定にご尽力頂いた前シンポ担当幹事の安江先生、ありがとうございました。

◇ 学会年会費納入のお願い

会計担当 出口善隆（岩手大学）



年会費を未納の方は、年会費（2,000円）をお振り込み下さるようお願い申し上げます。

本年度（2008年度）会費未納会員は94名、2007年度会費未納会員は15名となっております。本学会の収入は個人会費のみです。未納会費金額は、2008年度予算の会費収入金額の73%に相当いたします。このような状況が続けば、学会活動に支障が出ることも予想されます。

本学会財政を健全化するために、学会年会費のすみやかなお振り込みをお願いいたします。

お振り込み方法

「郵便振替口座」に、年会費をお振り込みください。

加入者名 応用動物行動学会

口座番号 02790-9-13298

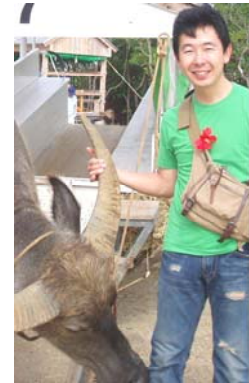
なお、お手数ですが、お振込みには郵便局に備え付けの「郵便振替払込用紙」（青色、振込人が振込料金を負担する用紙）をご利用ください。

過去の年会費振り込み状況がわからない場合は、
会計担当幹事：出口善隆（deguchi@iwate-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

◇ 通信・ホームページ関連のご案内

通信担当 竹田謙一（信州大学）

新年度にあたり、メールアドレスを変更された方は竹田（ktakeda@shinshu-u.ac.jp）までお知らせください。学会メーリングリスト（jsaab@shinshu-u.ac.jp）は、会員相互の情報交換ツールです。イベント情報のほか、研究の相談等、ご活用ください。



学会ホームページ（http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm）は 5 月下旬を目処に更新予定です。

◇ シンポジウム「野生動物との共存を考える」参加報告

高橋龍範

（宇都宮大 4 年生 / 現所属：合資会社 ファーム森）

今回のシンポジウムは茨城県水戸市の常盤大学内で行われました。この時期には第 109 回日本畜産学会が行われており、多くの方々が参加していました。前日には日本家畜管理学会および応用動物行動学会の研究発表会が行われていました。

シンポジウムの際、私は写真撮影係を担当させていただきました。突然ですが、発表時にカメラのストロボの使用などで不快な思いをさせたかもしれませんが、この場を借りてお詫びさせていただきます。

さて、本題のシンポジウムの内容は「野生動物との共存を考える」と題され、発表者は私の研究室の先輩である塚原直樹さん（東京農工大学連合農学研究科）と、八代田千鶴さん（北海道大学大学院）の二名の方でした。

塚原さんの講演内容は、大まかに言うとカラスの鳴き声を用いたカラスの忌避についてでした。私は現在養豚業を行っており、また近隣がスイカ農家であるため、カラスの被害についてよく聞きます。被害例については割愛させていただきますが、こういった現状か



ら塚原さんの発表は非常に興味深いものでした。塚原さんが研究されている音声による忌避の方法は、音声データ以外には特別な機材を必要としないことから、使用できる機材に制限の多い農家にとって非常に有用な方法で、農家にとって扱いやすいため、ぜひ農業向けに応用してほしいと思いました。

八代田さんの講演内容は、北海道のエゾシカ生息地の植生調査と、その地域に生息できるエゾシカの頭数を栄養の面から調査するという内容でした。私の知らない野生動物の食性や栄養学的な調査の講演で、エゾシカは季節によって変化する植生に合わせ、適応しているということから普段家畜化された動物としか接しない私にとっては、とても興味深い講演内容でした。また、質疑応答の時のライフルについての質問はとても印象深かったです。

忌避について、動物の植生への適応という異なる面からの研究内容を聞き、家畜の生産現場では全く聞くことのない内容で興味深く、また生産現場への応用もできるのではないかと思うこともあり、シンポジウムに参加してとても有意義だったと思いました。

最後に、このシンポジウムを紹介していただいた青山先生、シンポジウムの運営をいただいた皆様に感謝致します。

◇ 編集後記

ニュースレター担当 小針大助 (茨城大学)

今年度より、帯広畜産大学の河合先生からニュースレターの担当を引き継ぎました茨城大学の小針です。至らぬ点など多々あるかと存じますが、定期的なニュースレターの発行を通じて、皆様により良い情報を発信していければと考えております。今後ともご協力よろしく願いいたします。また、会員の皆様におかれましては、ニュースレターを通じて配信されたい情報などございましたら、以下の連絡先 (kohari@mx.ibaraki.ac.jp) まで、ご連絡お願いいたします。

